



教科指導において日本語指導が必要な子どもたちを支援するために

教育学およびその関連分野

研究者所属・職名 : 教育学部・教授

ふりがな いまい あこ

氏名 : 今井 亜湖

主な採択課題 :

- [基盤研究 \(C\)「教科指導における外国人児童生徒の教育支援に関する研究」\(2018-2023\)](#)
- [基盤研究 \(C\)「小学校教員養成における授業力向上プログラムの開発」\(2013-2018\)](#)

分野 : 教育工学、授業研究

キーワード : 外国人等児童生徒、教育支援、教科指導、教員養成、プログラム開発、教材開発

課題

●なぜこの研究をおこなったのか？(研究の背景・目的)

日本の公立学校で学ぶ外国ルーツの児童生徒は増加し続けており、その教育支援はハード・ソフトの両面で求められている。これらの児童生徒、特に日本語指導が必要な児童生徒の教育支援は、日本語教育を専門とする教師だけでなく、学級や教科を担当する教科教育を主とする教師も携わっている。本研究では、教科教育を専門とする教師が日本語指導が必要な児童生徒の教育支援、具体的には授業に参加するための支援を行うための基礎的な知識・スキルを教員養成段階から身につけられるように教員養成プログラムとその支援サイトの開発を行うことにした。

●研究するにあたっての苦労や工夫(研究の手法)

研究計画段階では、日本の公立学校に学ぶ外国ルーツの児童生徒の多様性に注目し、彼らの出身国の教育全般について文献調査・現地調査を行い、その結果から教員養成プログラムとポータルサイトの開発を行おうと考えていた。しかし、現状分析のために行った教育委員会担当者、各校の外国人児童生徒教育担当教員、取り出し教室担当教員、初期日本語指導員、適応指導員を対象とした調査結果より、日本語指導が必要な児童生徒が参加する教科の授業の特性分析から始める必要があることが分かり、その調査を新たに追加し、教員養成プログラムの開発を行った。



教科指導において日本語指導が必要な子どもたちを支援するために

教育学およびその関連分野

研究成果

●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

【教科教育を専門とする教師に求められる知識・スキルを学ぶ教員養成プログラムの開発】

(1)教科固有の語彙が増え始める小学2年算数科授業における教師の発話分析から、名詞に次ぎ、動詞が多く使われていること、算数科教科書だけでなく、国語科教科書に掲載されている動詞も教師は多く用いていることが明らかになった。これらの動詞から同音異義の動詞に注目し、教師が授業中によく使用し、児童が聞いて理解しづらい動詞を調査し、その結果を基にカードゲーム「いみあわせかあど」を開発した。これらの研究をふまえて、各教科の教科書を分析したところ、太字で表記されている「専門語」を説明する文章の中に同音異義の動詞が使用されていることが確認できたため、同音異義の動詞に注意しながら専門語をどう指導するかを考える学習内容を教員養成プログラムの教科指導法で扱う内容として組み込んだ。

(2)日本語指導が必要な児童生徒の教育支援に携わっている関係者を対象とした現状調査から、教科授業において用いられている教育技術が明らかになった。この教育技術が用いられている学習場面を分析・整理し、これらを教育方法の学習内容として開発したプログラムで扱うことにした。

【教科教育を専門とする教師支援サイトの開発】上記の知識・スキルを学ぶための教員養成プログラムの概要及びその教材とともに、教科指導を行いながら日本語教育も実施しなければならない教科教育を専門とする教師のための日本語教材リンク集からなる教師支援サイト(<https://www1.gifu-u.ac.jp/~akoi/project2024/index.html>)を開発した(図1)。



図1 教師支援サイト「教科指導のための日本語」

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

日本の多くの公立学校において日本語指導が必要な児童生徒はマイノリティーであるが、こうした児童生徒の教育支援に取り組むことは、マジョリティーである児童生徒の教育支援にもつながる。本研究の成果の一つである「いみあわせかあど」は、日本語指導の場だけでなく、特別支援教育の場でも活用されている。マイノリティーである児童生徒が日本社会で生きていくために必要な教育を受けるためには、教育現場だけでなく、そこに人材を輩出している教員養成を行っている大学もその支援の輪に入っていく必要があり、教育現場とともにハード・ソフトの教育支援を考えていかなければならない。



図2 いみあわせかあど